〔書　評〕

国立国語研究所編

『方言文法全国地図4』

渋　谷　勝　己

1．内容と構成

全部で6集が予定されている『方言文法全国地図』は，第1集の助詞編，第2集・第3集の活用編に続いて，本第4集から第6集までは表現法編である。表現法編の構成は，調査票の区分にしたがって示せば，次の予定であるという：命令・禁止・義務表現（第5集），強調・詠嘆表現（第5集），意志・勧誘・希望表現（第5集），推量・様態・伝聞表現（第5集），仮定表現（本地図では名称を「条件表現」に変更，第4集），疑問・反語表現（第5集），否定表現（第4集），授受表現（第5集），可能表現（第4集），過去・回想表現（第4集），アスペクト表現（第4集），あいさつ表現（第5集），待遇表現（第6集）。

第4集は，既刊分と同じように，「分布図」と「解説4――付 資料一覧――」1冊（以下「解説書」とし，「192ぺ左」のように記して引用する）からなり，後者はさらに，「方法」「各図の解説」「資料一覧」より構成されている。このうち「各図の解説」は，分布図を作成するにあたっての［語形の採用と統合］と［語形の記号化］の方針について，320ページにわたって記されている（第1集は96ページ，第2・3集合わせて304ページ）。作図にあたって個々の回答をよく検討し，詳細に説明を加えていることがわかるが，全般的に小見出しが少ないため，語彙的回答やタ形，待遇表現の採否など，特定の箇所を探そうとする場合にはやや不便である。解説書「6.1 過去・回想表現の概要と記号化」で付されたような小見出しが，全体にわたってほしいところである。なお，解説書の「まえがき」や4ぺ右で述べられた「資料一覧」のネットワーク上での公開計画は，すでに本集分までが実施に移された（http://www2.kokken.go.jp/henka1/dp/dp_index.html）。

一方「分布図」には，「どちらかというとモダリティー寄りのものが第5集にまとまっており，第4集には，活用編からの連続性が認められる」として（4ぺ左），否定表現a（10枚）・否定表現b（2枚）・否定表現c（4枚）・条件表現（6枚）・可能表現（13枚）・過去・回想表現a（10枚）・過去・回想表現b（2枚）・アスペクト表現（8枚），計55枚の地図と，「調査地点番号地図（第4集～第6集）」1枚が収録されている（カッコ内の数字は地図の枚数）。作図の方針は，既刊分と同様，「資料性の保持」ということが留意されている（4ぺ左）。ここで否定表現のa～cとあるのは，それぞれ，〔a：否定辞「ない」や形容詞「無い」に関わる各種表現（「ない」の活用）〕〔b：主に「動詞＋『は』などの付属形式＋しない」

という取り立ての構造による，否定の強調表現〕〔c：否定疑問文に対する応答表現〕を言い，また過去・回想表現のａとｂは，〔a：過去の回想や近い過去に関する詠嘆〕〔b：確信をもって表現するときの「いる」の過去または完了形式と，「○○さん，いるか」とたずねるときの「いるか」にあたる形式〕のことである。なお，この枚数のなかには，条件表現 172 図「行ったってだめだ」，過去・回想表現ａ187 図「おもしろかったなあ」，同 191 図「いたよ」，アスペクト表現 203 図「もう少しで落ちるところだった」など，質問文に含まれていた下線部の形式に相当する方言形式の分布を地図化し，当該表現に含めて掲載したといったものも含まれているので，当該表現の地図だけに限定すればその数は若干減る。このような，質問文を基本に据えた編集方針を疑問に思うむきが出てもおかしくないが，得られた回答語形の構成要素の複雑さ，地図間での相互参照のしやすさ等を考慮すれば，やむをえないところもある。

以下，本書評では，文法研究ではなじみの薄い，また解説書でも詳細に説明が加えられている「表現法」ということの内容について検討し（第 2 節），続いて，本集で取り上げられている表現法のなかでもっとも多くの地図が割り当てられている可能表現を取り上げて（第 3 節），本地図の特徴を検討してみることにする。

なお，これまで本誌に掲載された本地図書評とその応答のなかで議論された「資料地図」と「解釈地図」の問題については，評者には議論するだけの用意がない。本地図刊行の目的としてあげられた 6 つの課題――各地文法体系研究の促進，分布類型論等への寄与，言語地理学的研究，全国共通語の基盤とその成立過程の解明，文献国語史との関連についての考察，方言をめぐる国語・日本語教育のありかたの検討（解説 1，3 ぺ）――などに取り組むには「解釈地図」だけでは不足なのか（小林 1990：52），評者自身，まだ結論が出せずにいるからである。現時点では両者とも尊重しておきたい。

しかし，「文法」地図とタイトルを付した以上，「他のいかなる着眼点にもまして，語形の形態に注目する」（小林 1990：55）という姿勢が妥当かどうかは疑問である。本書評ではこの問題を中心に取り上げる。

2. 表現法とは

表現法ということについて解説書では，「状況（文脈や場面）・内容・意図などに応じて用いられる各地方言の言語形式を指す」と定義し，具体的に次のような特徴を指摘している（3 ぺ）。

（1） 活用編では，否定形・終止形など学校文法の活用表の中で扱われる簡潔な形態を中心に扱ったのにたいし，表現法編では，状況を具体的に特定化したり，用法をひろげた範囲を対象としている。

（2） 表現法編では，「活用形の活用」のような枠組みが扱われる。

（3） 活用編で扱った活用形も一定の状況や意図に依存した表現であり，活用編と表

現法編の間に厳密な区分のあるものではない。見方によっては，表現法は活用などを包括するとも言える。

（4） その他，一般に活用として扱いにくいもの，応答詞，あいさつ表現など，意図や場面に依存する表現や，アスペクト表現のように動詞自体の持つ性質を考慮したような項目を含む。

この説明によれば表現法とは，慣用的な表現や条件表現（複文），調査文の意味を語用論的に表す形式などのほかに，単文レベルでは命題部のそれを除いた文法カテゴリを，カテゴリ間の連続性にも留意して取り上げたものといったことのようである。

この文法カテゴリ間の連続性という問題は，1枚の地図に掲載されるべき形式の意味的同一性ということと関連して，文法レベルにおける言語地理学的な研究を格段にむずかしくするところである（渋谷2000）。本地図では，たとえばアスペクト項目の将然態にかかわる項目では，シヨル（一般にはアスペクト形式とする）とシソウダ（一般にはモダリティ形式とする）を拾い上げて，当該の表現内容をどのように表すかを全国的に見渡すことができるという点に配慮したといった例に見るように，全般に項目のねらいよりも語形の採用範囲を広く設定し，内容や意図が大きく外れない限り，ある程度広く採用するといった処置を採っている（4ペ右）。「項目のねらいや中心となる文法的な内容，各表現法の中核的用法と，採用した語形の範囲は重なるものの，一致するとは限らない。（中略）この点に十分な配慮の上での利用を求めたい」（4ペ右―5ペ左）という注意は，本地図を読むにあたって心すべきことである。

さて，どのような形式を1枚の地図に含め，またそれを文法的にどう処理するかという点には，作図者の文法観・言語観が大きく反映する。当然，本地図とは異なる立場を採るむきもあろう。このことについて，以下，評者なりの考えを述べてみたい。

3. 本地図の特徴――可能表現を中心にして――

本節では，可能表現（173図～185図）を例にして，本地図の特徴を検討する。具体的にはまず解説書の構成にしたがって，語形の採用と統合（3.1）と，語形の記号化（3.2）の問題について検討したあと，調査項目等，本地図のその他の問題点について述べることにする（3.3）。可能表現以外のケースについては紙幅の許す限りにおいて注に記す。

3.1 語形の採用と統合

音声面でのバリエーションあるいは共起した終助詞の多様性といったことからくるものも含めて，ひとつの調査項目についてえられた語形は，本地図の場合，かなりの数に上っている。その点，語形の採用と統合，語形の記号化という作業にあたった作図者の仕事の量は，並大抵のものではなかったはずである。丁寧に書かれた解説書からもそのことは十分にうかがわれる。そのことを承知した上で，本節と次節では，この作業の結

果に見られる若干の問題点を指摘し，また希望を述べたい。

（a）　可能表現では，調査文にある動詞と異なる動詞がえられた場合（語彙的回答）には採用しない（163 ぺ左）といった方針をはじめとして，動詞の活用を第一基準として調査項目や採用語形を設定しているところがある（162 ぺ右）[注1]。しかし，表現法編である本集は，活用よりも可能表現であることを優先すべきであり，「着る」についての「モヨウ」など（『日本方言大辞典』によれば意味は若干ずれている），可能であることの条件（能力・状況など）が満たされていれば採用してもよいように思う（246 ぺ左）[注2]。

（b）　可能表現については，採用語形は，現在時制で単純に言い切る場合に限定しており，「〜ようになる」が後接する形式や，テンス・アスペクトの異なる形式（jomeda など），推量形式べ・待遇形式（jookijoraN など）などが付加された形式は不採用としている[注3]。しかし，秋田など，東北地方の jomeda は過去を表すものではなくタ形で現在を表すものであり（秋田県教育委員会編 2000：104 など），jomeru 相当の形式として採用すべきである[注4]。また上にあげたその他の形式も，その地点で使用する可能形式についての情報をもたらすものであるから，補助符号等を付して採用してもよいように思われる。

（c）　語形の採用ということでは，語用論的なものをどこまで採用するかという問題もある。182 図では八丈島の「ヨモーホーナッキャ」が採用されているが，180 図「ヘッチャラダ」，181 図「〜ヤスイ」「〜具合ガ良イ」，182 図「〜知ラナイ」「〜ダメダ」，183 図「〜ヅライ」「〜ニクイ」「〜イケン」などは不採用となっている。本地図は，「語形の成り立ちや変化過程，また，文法上の体系的背景などには，第 1 次的な重点を置いていない。これらの判断は，利用者にゆだねられている」と明記されてはいるが（13 ぺ左），もともと自発や完遂など，隣接意味分野の形式だったものが意味的に拡張・転化してきたのが可能表現の歴史であることを考えると，将来の動きを見据えたものとして，できるだけ広く採用しておくということも考えられる。そのほうが，内容や意図が大きく外れない限り，ある程度広く採用するという本地図の方針にも合う。

（d）　逆に本地図は，資料性ということを重んじているために，文法事象の地図としては不必要なノイズがかなり多い。たとえば，可能表現の分布を示すのに，jomukoto，joNkoto に異なった記号を与える必要がどの程度あるのか疑問である（165 ぺ右）。子音の有声無声，促音の有無，長音と短音，終助詞の有無[注5]などについて異なった記号や符号を与えていることも同様。孤例も多い。このことについてはもちろん，必要に応じて取捨選択して読めばよいという議論はなりたつ。全国の分布が大局的に把握できる準備調査の結果が一部公開されている（前記 URL）ことも念頭におくべきであろう。しかし，「解説」に資料一覧が掲載され，またその電子化データが容易に入手できること，凡例部が大きいために（一定数以上の地点で使われる語形は凡例で太字にするなどして探しやすくする方法もあろう）地図そのものが扱いにくくなっていること（最も大きな地図では，1 枚の長さが 105 cm，バインドした状態では 135 cm）を考えると，このような情報こそ利用者にゆだ

ね，文法をねらいとした本地図上では，(判断がむずかしいが)文法化にかかわらない音声的な変種はできるだけ統合するという考え方もありうると思う。[注6]

(e) 最後に，可能表現だけにかかわることであるが，179 図「することができる」と，180 図「できる」の処理の方針（そもそも調査項目の設定）には問題がある。179 図では，動詞「する」を含まない「デキル」「デル」「ナル」を不採用としたために，335 地点からえられた回答が無視された。また 180 図では，「やる」や「する」を形式にもつ 151 地点の回答が不採用となっている。その結果，N（無回答）となる地点が一部の地域にまとまって分布し，また各地に散在することになった。デキルは，カケルなどと対等に並ぶ「する」に対する補充形である。この 2 枚の地図は統合すべきであろう。

3.2 語形の記号化

本地図の記号化の方針は，180 図を除けば次の通りである（一部単純化する）。

(1) 可能形式をまず 6 つの部にわける。

(2) 可能の意味を担う形式（前前後部・後前部）の系統的な違いによって【記号の色】を与える。具体的には，スルコトガデキル系統に〈水〉，可能動詞系統に〈紺〉，助動詞レル・ラレル系統（自発のサルも含む）に〈緑〉，副詞類に〈橙〉，「イイ」等の形式を伴ったものに〈茶〉，補助動詞類に〈赤〉を与える。

(3) 上記可能の意味を担う形式（後前部）の変異を【記号の形・記号内の線】で示す。

(4) 動詞や補文標識（「こと」）の変異を【記号の塗りつぶし方】で表す。

(5) 活用語尾や否定辞の変異を【記号の方向】で表す。

(6) 副詞の種類や補文標識に後接する助詞の変異，終助詞の存在を【補助符号】で表す。

(4)～(6)の情報をどの程度地図に盛り込むかといった問題を除けば，この一般的な方針そのものについて異論はない。しかし，細かな点では次のような問題がある。以下にいくつか例示する（番号は上に対応）。

(1-1) まず解説書について，語形の分割方法が文法用語ではなく，「語頭から見て最初の de･di」(170 ぺ右)のような音声面での特徴によって説明されている部分が多く，一覧表を参照しても，すぐには理解しにくいという問題がある。通方言的に同じ形態分析を施すことが難しいことはよくわかるが，解説書の一部にあるように，多少の例外があることをことわったうえで文法用語によってまとめたほうがわかりやすい。

(1-2) 関連して，164 ぺ左，可能動詞について，たとえば「ヨメル」を jome＋ru と分割したのでは可能を表す部分がなくなって，他の可能形式の形態構造と整合性がなくなる。jom＋e＋ru と分割したい。関連して，「キレル」と「ヨマレル」に異なった色を与える場合，いずれも ki＋re＋ru，joma＋re＋ru とするには問題があろう。165 ぺ左，「キレル」の「レル」を可能の助動詞とするのはどうか。

(1-3)　沖縄に見られる補助動詞のオーセルは，173図（肯定）ではjuu-sun（171ペ），182図（否定）ではjuusa-N（239ペ）となっている。後前部について一貫性がない。

(2-1)　2つの可能形式が混淆してできた形式がいくつかある。これらについて本地図では，たとえば次のように色が与えられている。

kekkonijomarer（173図），jookirareru（175図）：緑＝ラレル系統

joojomeru（173図），jookireru（175図）：紺＝可能動詞系統

しかし副詞類や補助動詞が一般に衰退しつつあること，また，ラレルや可能動詞は能力・状況いずれをも表すが副詞類は能力に偏る有標形式であることなどを考えると，上の形式にはむしろ〈橙〉（副詞類）を与えて目立たせたい。また，

jomerukotogadekiru（173図）：水＝スルコトガデキル系統

の場合には，調査文に引かれた場合も考えられるので，〈紺〉（可能動詞系統）を与えるほうが妥当であろう。ちなみに，スルコトガデキル系統を凡例の最初におくことや，地図のなかでは目立つ〈水〉を与えることも，同じ理由から賛成できない。

(2-2)　177図のokiraruと179図のsareruに〈紺〉（可能動詞系統）が与えられているが，〈緑〉（助動詞系統）を与えるべきではないか。

(2-3)　174図などで東北地方のjomaeru等に〈赤〉（補助動詞系統）を与えるのは問題である。これはr音脱落によって生じた形であるので，〈緑〉を与えたい（joma＋e＋ruの「e」の部分だけで色を与えたということか）。176図のkiraeruには緑が与えられている。

(2-4)　182図jomeenaiには〈紺〉，jomeeNには〈赤〉が与えられている。これらは隣接して分布しているので，いずれかに統一すべきであろう。ちなみに173図などのjomeeru（紺）も含めて，可能動詞が「動詞連用形＋補助動詞-eru」の融合によって成立したと解釈する場合には，これらの形はその過渡的な形ということになり，〈赤〉（補助動詞系統），〈紺〉（可能動詞系統）いずれを与えることも妥当な処置となる。本地図のように，単に形式的な類似性によって配色を行う場合にも迷うところであろう。

（3）　文法上の性質という点では，「ヨミエル」系統・「ヨムコトガナル」系統を，可能の意味を担う補助動詞として一括し，両者に〈赤〉の記号を与えているが(165ペ)，「ヨムコトガナル」が分析的な表現であることを考えれば，後者はむしろ，文法的には「ヨムコトガデキル」と同じグループに含まれる。

（6）　可能の副詞joo・ee・jasu・kekkoni，「スルコトガデキル」のga・ŋa・noの区別など，いずれも補助符号で示されているが(166ペ左)，どのような形式が可能表現として採用されるのかということを考えた場合，前者の違いは重要であり，補助符号などで区別されるべきものではない。副詞であることの共通点を重視して同じ色の記号を与えるのはよいが，形を変えるなど，大きな区別が必要なところである。

3.3 調査項目設定の問題点

調査項目について本地図は，以下のような問題を残したように思われる。

（a） 文法体系（特に意味・機能的側面）に対する配慮が少ないこと。たとえば可能表現については，「能力可能」「状況可能」といったこれまでの分類を踏襲し，属性可能以外に新たな分類枠を検討するという試みはなかった。本地図の目的ではないにしても，各地における可能形式の分節のありかたを浮き彫りにし，また歴史や文法化の度合いを読みとるためには，「(うちの孫は最近まで字を)読むことができなかった」といった過去の文や，「きのうはすいすい泳げた」といった実現を表す可能文も，調査がほしいところであった。なお，本地図の可能表現の調査文には肯定文のほうが多く設けられているが，否定文のほうが調査がしやすい。また形式の分布も明瞭に現れる傾向がある。

（b） それぞれの地図に掲載される語形の表すところが意味的に必ずしも等価なものではないこと。このことには，(アスペクト項目など)提示した絵があいまいであったことなどもかかわっているようであるが(336 ぺ左など)，より根本的には，調査文の内容の特定が十分でないことがあずかっている。可能表現についてはこの問題は少ないが，過去・回想 a の 186 図・187 図「あのときはおもしろかったなあ」などでは，解説書によれば，「過去か回想か」「一回的な事象か複数の事象か」「ひとりごとか聞き手目当てか」といった点で文法的な特徴の異なる回答が地図上に混在しているようである。

こういった問題に対処するためには，やはり，各地方言（や古典語）の文法体系を詳細に記述し，その結果に基づいて調査項目を設定する作業が必要である[注7]。ここでいう記述とは，30 ページほどの紙幅のなかに音韻・活用・文法・敬語など（特に文法）を列挙するような，これまでの方言学に一般的であった総花的な記述のありかたをいうのではない。一形式の意味・機能の詳細な分析から始まって文法カテゴリを認定し，さらにそれぞれのカテゴリの体系内部，体系間の関係を詳細に描き出すような試みのことである。このような作業を踏まえて本格的に地理的分布調査を行うとすれば，たとえば工藤真由美を中心とするアスペクト・テンス・ムードの通所的研究（工藤編 2001）に見るように，調査項目をまず網羅的に設定してみることが必要になる(600 項目)。もちろん，このようにして設定した項目を全て調査するか否か，どのような方法で，誰を対象にして調査を行うべきかといった点はあらためて検討しなければならないが。

なお，本地図の場合，方言が消滅の危機に瀕しているという認識(『日本言語地図』作成の経験による)から調査を急いだという事情，および最良の調査票は調査の後にえられるという一般則は考慮する必要があろう。本地図の回答語形が各地方言の体系のどの側面を切り取ってきたのか，今後，検証調査を行ってみるのも興味があるところである。

4. まとめ

以上，本書評では，「表現法」という一般的な問題を検討したあと（第 2 節），可能表現

を中心に，作図および項目設定にかかわる問題点を指摘した（第 3 節）。

基本的に本地図は，方言研究者がこれまでの方言学の成果に基づいて方言研究者のために作成したものであると言えるであろう。文法研究者や文法史研究者にとっては，各文法カテゴリの実態を把握するための項目数が大幅に欠如していること，形態優先の編集であることなどに不足を感じることは否めない。しかし，そのような問題点があるにしても，本地図は，刊行の目的にかかげられたような，今後詳細に記述すべき問題のありかや地点を発見するためのデータとして[注7]，あるいは，言語変化を大局的に把握するための資料として活用することは十分にできる。方言文法記述研究や言語地理学研究を再活性化し，また新たな研究を模索するためにも，大いに利用したい。

注 1　本地図が活用を優先していることは，6 集のうち活用編に 2 集をあてていること，否定表現 a として「ない」の活用をまとめて整理していることなどにも明らかである。

注 2　語彙的回答については，204 図・205 図（アスペクト表現）などで採用している。

注 3　推量形式を含む回答は 172 図「行ったってだめだ」で，また待遇表現については 192 図「書いたよ」・197 図「いるか」で採用している。

注 4　198 図「散っている」・202 図「有リヨル」（いずれも進行相）では～テイタ形を採用。

注 5　終助詞については，終助詞付き回答の採否 A 方式が設定され（11 ページ右），また 187 図「おもしろかったなあ」・191 図「いたよ」などではえられた助詞の種類が多様なまま採用されており，少なくとも本集では組織的・系統的に扱われているとはいいがたい。

注 6　本地図では「文法を対象とした地図としては必要性が低いと判断した細かな音声の差異を除」いたとするが（小林 1990：54），まだ十分ではないということである。

注 7　本書の刊行の目的として「（1）各地の文法体系に関する調査を促進する」とあるが（本稿第 1 節参照），本地図作成に要したような大規模な調査と刊行作業を何度も行うことが困難であることを踏まえれば，本末転倒の感があることは否めない。

［引用文献］

秋田県教育委員会編 2000『秋田のことば』無明舎出版

工藤真由美編 2001『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』（文部省科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書）

小林隆 1990「方言地図の方法について」『国語学』163

渋谷勝己 2000「方言地理学と文法」『阪大日本語研究』12

（1999 年 4 月 30 日発行　大蔵省印刷局刊　B 4 判　図 56 枚・解説　747 ページ　本体価格 39,000 円）

――大阪大学助教授――

（2001 年 8 月 9 日　受理）